

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 人間総合科学大学

所 属 保健医療学部看護学科

名 前 牧野 由加里

作成日 2023年9月28日

1. 責務（何を行っているか、何を果たしているか）

- ・在宅看護学領域の講師として、在宅看護援助論Ⅰ（必修）・在宅看護援助論Ⅱ（必修）・在宅看護学実習（必修）・統合実習（必修）、基礎看護学実習（必修）、大学生入門（必修）、卒業研究Ⅱ（必修）を担当した。また、看護国際の領域において、看護国際援助論（選択）、国際看護論（必修）を担当している。
- ・地域産学連携センターの委員として、毎年開催される「ひなまつり@人間総合科学大学」や「さいたまシティマラソン：ボランティア」などを担当し、学生ボランティアや地域からの参加者の調整を行ない、地域との協働・連携を図っている。
- ・看護学科4学年を担当し、学生の生活・学修上の相談・支援業務にあたるほか、就職支援（相談、履歴書・面接指導）や国家試験対策業者模試の担当をするなど、国家試験合格に向けて学習支援を行っている。
- ・2018年から2021年まで、業務提携校であるTHUVにて基礎看護技術、老年看護学、在宅看護学、母性看護学等を教授。帰国後は、THUVからの留学生の学習環境の調整やTHUVとUHASの交流事業に参画し、両大学の学生が、相互を理解することから始まり、グローバルな、物事に対する幅広い視点や理解を得られるよう支援している。
- ・学科内の危機管理衛生委員会委員として、学生が安全に大学内および実習施設で学修できるよう支援している。
- ・埼玉県看護協会さいたま支部役員（教育担当）として、月ごとの役員会への出席、与野イオンで行われた「看護の日イベント」への参加、「看護研究・成果発表会」の計画・実施等をとおして、「看護の質向上」「看護師が働き続けられる環境づくり」「看護領域の開発・展開」「地域への貢献」に寄与している。

2. 理念（教育に対する考え方）

在宅看護学や国際看護論の授業を通して、学生に伝えたい理念は「グローバルな視点を持ち、あらゆる場においてあらゆる年齢・健康レベルの人々の健康を保持・増進することのできる知識・技術・態度を学生に修得してほしい」そしてなによりも「看護は楽しい、魅力的な仕事であることを理解してほしい」ということである。少子高齢化やグローバル化をはじめとした社会の変化により、人々の健康や看護へのニーズは多様化してきている。日本国内にあっても、多くの国や地域にルーツをもつ人々やさまざまな価値観をもつ人々が生活している。また、療養の場も病院中心から地域・在宅の場へと変化している。さらに外国にルーツを持つ人々もふくめ、地域で生活している人々に対する災害支援も在宅看護や国際看護の役割である。そこで、「国際看護論」や「看護国際協力論」において、さまざまな文化的背景や宗教・人生観をもつ人々の存在とそれを受容しつつ「健康」を援助する思考・方策について、「在宅看護援助論Ⅰ・Ⅱ」「在宅看護学実習」では、さまざまな生活の場で療養生活を送るあらゆる年齢・健康レベルの人々を援助するための方法論について、学生と共に考えていきたいと思っている。また、日本看護協会は看護師の倫理綱領において、「看護職は対象となる人々との間に信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて、看護を提供する」としている。対象となる人々との間に信頼関係を築くためには、看護専門職としての豊富で正確な知識・確実な技術・安心を与えられる態度が必要である。担当するすべての教科において本件を伝えていきたい。これらを通じて、本学のカリキュラムポリシーで

ある「専門的知識・技能と物事に対する幅広い視点や理解を得る」「専門的職業人および社会の一員として、自立と共生のこころを養う」ことができると考えている。

3. 方法（教育方法において大切にしていること）

学生は、今後の看護を担っていく人材である。また、これまでの基礎教育において、今後の IT 社会に順応した競争力のある人材に育てていくための教育方針である STEAM 教育を受けてきた世代でもある。医療・看護、とくに地域・在宅看護領域においては、ICT を活用し、さまざまな情報をさまざまな職種で共有する時代になってきている。また、世界の ICT 化にともない、さまざまな国・地域とも比較的簡単にコミュニケーションをとることができるようになっている。

そこで、教育方法においては、STEAM 教育を受けてきたという学生のレディネスも考慮し、アクティブラーニングおよび ICT の活用をより一層すすめる。アクティブラーニングにおいては、学生に問題提起をし、それについて学生自身が調べ・考察し、発表できる場を設ける。学生自身が調べる場面においては、インターネット等を活用することを勧め、適切な資料にアクセスすること、著作権等に配慮した資料作成などの情報リテラシー教育も行っていく。また、THUV での勤務経験を活かし、授業の中で ZOOM 等遠隔会議システムを利用して、THUV との交流のチャンスをもち、学生がグローバルな視点・他者理解をはぐくむ一助とする。

教員の授業だけではなく、訪問看護師・福祉機器関係企業・民生委員などの地域の方々・地域で療養生活を送られている当事者などを特別講師としてお招きし、「現場」「臨地」のリアリティー感を学生に伝える。とともに、地域における多職種の理解・連携について理解する機会とする。また、私自身も国の内外を問わず学会・研修会に参加するほか、地域での行事にも参画し、知識・経験・見分を深めるとともに、地域においてさまざまな人々とのかかわりを持ち、それらから得た知見やご縁を学生の学びや地域産学連携センターでの活動に還元する。

4. 成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

「在宅看護論Ⅰ・Ⅱ」「在宅看護領域実習」では、「在宅看護は楽しい」「将来訪問看護ステーションを開設したい」「授業で多職種や民生委員さんの話を聞いてその仕事の理解につながった」「地域の高齢者との活動を通じて、地域で活動している高齢者の実際がわかった」という評価や感想があった。将来のキャリアアンカーとなる授業・実習ともなっている。

「看護国際協力論」では、「宗教による生活習慣の違いが興味深かった。また、それが健康の保持・増進にどのような影響を与えるかがわかった」「国際協力について、しっかりと学ぶことができた」「日本で働く外国人の環境が理解できた」「やさしい日本語を使うことが大切であることがわかった」という感想・評価を得ている。学生は、国際看護の視点が、日本の国内においても必要であることが理解できている。今後さらにグローバル化が進む日本において、看護専門職として必要な技能を修得する一助となっている。

5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

1. 「在宅看護援助論Ⅰ・Ⅱ」「在宅看護学実習」「統合実習（在宅看護領域）」の中短期目標
 - 1) 学生が授業時間に意欲的な態度で臨むことができる
 - 2) 「授業資料がわかりやすい」の評価が4.0以上になる
2. 「在宅看護援助論Ⅰ・Ⅱ」「在宅看護学実習」「統合実習（在宅看護領域）」の長期目標
 - ・訪問看護ステーションに勤務する卒業生が増加し、訪問看護ステーションを経営する卒業生が現れる。
3. 国際看護に関する2科目（国際看護論、看護国際協力論）の中短期目標
 - 1) 国際看護に興味を持つ学生が増加し、4年次の看護国際援助論を選択する学生が増える（2023年度13名）
 - 2) THUVとの学生間の交流会（ZOOMを用いて）を各期に1回以上実施する

* 表紙を含め、全体として、3～10ページ程度とします。

【添付資料】

- * TPの記載内容を客観的に示すためのエビデンスとなる資料項目を箇条書きで列挙ください。
（シラバス、開発教材、学生アンケート等、特に特徴的なものを列挙し、必要に応じて、
すぐに確認できるようにしておきます。）